岐阜大学機関リポジトリ
Gifu University Institutional Repository

ことばと文化の学び(3)：英単語の楽習

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 仲, 潔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/79262

ことばと文化の学び（3）
― 英単語の楽習
Language and Culture Education (3)
：Learning English Words with Fun

仲 潔
NAKA Kiyoshi

1. はじめに

英語科教育において、「コミュニケーション能力の育成」が求められるようになって久しい。2017（平成 29）年 3 月に告示された『学習指導要領』では、「育成を目指す資質・能力の三つの柱」として、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」が設定された。このうち「学びに向かう力、人間性等」については「外国語の背景にある文化に対する理解を深め」ることが明記されている（文部科学省 2017a）。残念ながら、「文化」に対して明確な定義は記されていない。ただし、「外国語の背景にある文化」を扱う理由として、「『聞き手、読み手、話し手、書き手に配慮しながら』コミュニケーションを図ることが大切であり、その一つとして相手の外国語の文化的背景によって『配慮』の仕方も異なってくることが考えられる」（文部科学省 2017b: 15）という見解が記されている。さらに、「外国語の学習を通して、他者を配慮し受け入れる寛容の精神や平和・国際貢献などの精神を獲得し、多面的思考ができるような人材を育てることも必要である」（同）との認識もみられる。これらから、外国語を「使う」際に、相手がもつ「文化」に根ざした行動様式や価値観などを学ぶことを念頭においていると考えられる。

もちろん、異質な他者とコミュニケーションを図る上で、自らのものの見方・価値判断だけに依拠し、他者の発話を理解することは避けられるべきであることは理解できる（cf. Byram 1997）。しかし、多くの日本人英語学習者にとっては、英語を用いて実際にコミュニケーションを行う機会はそれほどない。さらに、「英語を用いる」という次元に到達するとも限らない。あるいは、英語を用いるようになるまでの過程においては、「文化」への理解はできないかといえば、そうではない。あらゆる「自然言語」が当該社会の文化の影響から自由ではない以上、英語の表現そのものの背景にも、ものの見方や価値観などを垣間見ることができる。ことばの働きを、森住（1992）にならい「伝達機能」、「認識機能」、「関係機能」と分類するならば、英語を用いる際の文化とは関係機能であり、日本語と英語の表現の異同の背景にある文化が認識機能と考えることができる。本稿では、主としてこの認識機能について扱う。それにより、英語表現の学習過程においても、自らのものの見方や価値判断とは異なるそれを知り得ることを示唆したい。次節ではまず、学習指導要領における目標を確認し、本稿の位置づけをより明確にしたい。3 節では英語表現のうちいわゆる単語に焦点を絞り、その背後にある文化や発想法を示す。

2. コミュニケーション能力の育成とことばの認識機能

2.1 英語科教育の目標とことばの認識機能

英語の授業を行う上で欠かせないものの一つが、教材である。文部科学省の検定済み教科書はもちろんのこと、教師の自作の教材も、その内容に教育的な配慮が必要なのは言うまでもないだろう。『学習指導要領』には、教材について次のような文言がある。

> 英語を使用している人々を中心とする世界の人々や日本人の日常生活、風俗習慣、物語、地理、

歴史、伝統文化、自然科学などに関するものの中から、生徒の発達の段階や興味・関心に即して適切な題材を効果的に取り上げるものとし、次の観点に配慮すること。

(ｱ) 多様な考え方に対する理解を深めさせ、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと。

(ｲ) 我が国の文化や、英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養うのに役立つこと。

(ｳ) 広い視野から国際理解を深め、国際社会と向き合うことが求められている我が国の一員としての自覚を高めるとともに、国際協調の精神を養うのに役立つこと。

（文部科学省 2017a: 138　下線は筆者）

英語は、さまざまな国・地域で用いられ、それぞれ独自の発展を遂げている。各々の国・地域の社会文化的な影響を受け、新しい表現が生み出されているのである。そのすべてを網羅的に身につけることは、不可能ではないにせよ、あまりにも非効率的である。また、World Englishes 論や English as an International Language 論、English as a Lingua Franca 論の立場では、それぞれの英語変種間に力関係は想定されていない。つまり、さまざまな英語は対等であるという認識である。したがって、『学習指導要領』が提示するように「公正な判断力」を養うのであれば、標準英語だけを特別視するわけにはいかない。標準英語から見て「正しくない」表現であっても、意思疎通できる範囲内においては、地域の社会文化に根ざした表現を尊重するべきなのである。

ところで、ことばにはさまざまな働きがある。昨今の英語科教育では「コミュニケーションの手段」としての機能が重視されるが、それだけではない。森住（1992）は、言語が異なることで現実の描写方法が異なる性質を「認識機能」と呼んでいる。これは上述の『学習指導要領』でいうところの「英語の背景にある文化に対する関心」と親和性があるだろう。日本語と英語のように言語が異なることで、言語で表現する際に、現実の切り取り方が異なることがある（もちろん、同じであることもある）。そのような異同は、異文化への興味関心を喚起する契機になり得るだけではなく、英語を身につける上での「壁」となることもある。したがって、英語を身につけたい場合であっても、そうではない場合であっても、ことばの認識機能は「役に立つ」とともに「ためになる」ものであると考える。

2.2 文化に根差した表現

英語がさまざまな地域文化の影響を受けて発展しているということは、裏を返せばその地域文化を知る契機になり得る。『学習指導要領』にあるように「英語の背景にある文化に対する関心を高め、理解を深めようとする態度を養う」のであれば、英語が使用されている社会文化的状況への理解や、英語の言語表現に表出しているさまざまな地域文化の価値観から学ぶことは少なくないはずである。英語変種間が平等である以上、アメリカやイギリスなどの英語を第 1 言語とする国・地域での表現やフィリピンやシンガポールなどの英語を第 2 言語とする国・地域の表現、ひいては日本のように英語を異言語間コミュニケーションの手段として使用する場合の表現も同等の価値がある。とはいえ、あらゆる地域の英語を学ぶことは非現実的であるのも事実であろう。

これらを踏まえ、平成 29 年に告示された『学習指導要領』が示す英語科教育の方向性である「国際共通語としての英語」の立場を、日本の英語教育に反映させていくためには、他者の英語を聞いたり読んだりして理解できる次元と、自らが英語を話したり書いたりする次元とを分けて考えるべきであろう。藤原（2017）が指摘するように、受信レベルの英語と発信レベルの英語とでは、求める英語のレベルを分けて考えるべきである。少し具体的に考えてみよう。

日本語では、乱れた生活態度や悪事をやめて、真っ当な職につくことを「足を洗う」と表現する。もともとは、田畑での仕事を終え、泥まみれになった足を洗うという意味であったとされる。英語で

は、「洗う」対象が「足」ではなく「手」となる。つまり、“wash one’s hands of ～”となる。その由来は、新約聖書のマタイの福音書とされる（山田 2019: 11）。もちろん、“wash one’s hands”だけであれば、文字通りに「手を洗う」ことを意味する。そのため、最終的な意味の決定は文脈に依存せざるを得ない。日本語でも、悪事をし始める時には「悪事に手を染める」のように「手」を用いて表現することがある。したがって、「洗う」べきなのは「手」であるとも言えるが、何も反省していないというわけではない。

また、英語の“cook”という単語は、「料理（をする）」と訳されることが多いが正確ではない。“cook”は、「火を使って料理する」ことであり、火を使わない料理には“make”や“prepare”を用いる。例えば、“bake”は「オーブンで焼く」、“roast”は「オーブンで肉を焼く」、“grill”は「直火で焼く」など使い分けられる。それに対し、日本語の「料理」は刺身をはじめ、素材の鮮度が重視される。英語の“cook”が素材の味を調整する文化を背景にするならば、日本語の「料理」は素材の味を活かす文化であるといえよう（安井 2010: 136-139）。なお、「素材の味を調整する」ことから派生して、口語では“cook the books（帳簿をごまかす）”という表現もある。

他にも、Apple の CEO であるティム・クックは“mother of all”という表現を使うことがある。これは「とてつもない、とんでもない、超すごい」という意味で、例えば、“I got into the mother of all traffic jams.（私はものすごい交通渋滞に巻き込まれた［出くわした］）”のように使う。このような“mother”の使い方は、日本語の「母」という言葉からは想像しにくい。同じように、アメリカでは野球はポピュラーなスポーツの 1 つであるが、その野球場は日本と比べて個性的なものが多い。大きさや形など、いろいろある。そのため、“a ballpark figure”で「およその数字」という意味になる。また、“Her answer is not even in the right ballpark.”（彼女の答えは根本的に間違っている／まったくのデタラメ）のような表現もある。これは、いろいろな野球場があるなか、「正しい（right）」ものはないはずなのに、それが仮にあるとして、その中に「さえ（even）」、「彼女の答え（Her answer）」が入っていない、ということから生まれた表現である。

これらの表現の違いの背景にある文化を、英語のように世界中でさまざまな地域で用いられている言語の場合、その全てを理解することは現実的ではない。したがって、下の表に示すように、相手の用いる英語表現からは文化的な気づきや学びを求め、あくまでも自らが用いることを目指す必要はない。受信レベルでは異文化理解への扉として活用し、発信レベルでは自己表現の鍛錬に比重を置くべきであると考える。慣用的な表現は文化に根差しているため、異文化の人には伝わりにくいからである。つまり、異言語使用者間のコミュニケーションの手段として英語を学ぶのであれば、「聞いてわかる」「読んでわかる」を目指し、自ら用いることを目指す必要はない。

	【受信レベル】	【発信レベル】
目的	異文化理解 →聞く・読む場合にわかる、または、異なる文化への興味・関心の喚起	国際共通語としての英語の表現 →文化に根差した表現を避け、意味上、類似した表現で代用
例	日本語の「足を洗う」は、英語では“wash one’s hands of ~”となる。	quit, resign などで代用

表 1. 受信レベルと発信レベル

なお、ここでいう「異文化理解」とは、他者の文化への興味・関心を喚起することが目的である。それらを「知る」ことにより、多様なものの見方を養う基礎とすることを狙う。このような「教養」的な側面は、昨今の英語科教育において軽視される傾向にある。言うなれば、ことばの伝達機能に変調された英語教育観である。これに対し、安井（2010）は、次のように述べている。

「ことばはコミュニケーションの手段である」と大上段に切り取ってしまうことは、コミュニケーション以外にも文化を支える大きな、そして多くの機能が備わっている「ことば」を取り巻く世界を無視し、豊潤なことばの世界のほんの一部しか見ようとしない愚を犯すことになる。グローバル化の名のもとに、「コミュニケーションの手段」という、ことばが人間生活の中で果たしている役割のごく表層の部分のみを声高に取り沙汰する風潮は、文化への理解を、ひいては、人間への理解を縮小し、浅薄なものにしかねない。ことばへの不敬である。

（同：vii）

筆者もまた、ことばの伝達機能に偏重した英語科教育に異議申し立てを繰り返してきた（仲 2002, 2008 など）。本稿では、国際共通語としての英語の理念を念頭に、「標準英語」から他者の文化への気づきを得たり、興味関心を喚起することを目指しつつ、自己表現としての英語運用能力の向上を視野に入れる。したがって、以下ではいくつかの英語表現を取り上げて、その文化的背景を論じつつ、文化に根差さない英語表現を代案（English as a Lingua Franca、以下 ELF と略す）として示す。

3. 英単語の言語文化論

本節では、拙稿（2013）に引き続き、言語文化観にゆさぶりをかける知識を、問題形式で取り上げる（まずは読者各位が自分なりに考えてみることをお勧めする）。なお、上述したように、これらの表現の背景には社会・文化が深く関係しているため、その違いを汲み取って「読んでわかる」／「聞いてわかる」ことができれば十分である。国際共通語として英語を用いる場合、以下に見るような各文化に固有の表現を、その文化に属していない私たちが使う必要はない。もちろん、自らの言語表現の幅を広げるという意味で、その使用を否定するつもりはないが、さまざまな言語文化を背景にする者同士のコミュニケーションの場においては、せっかく身につけた表現であっても、相手に伝わらない可能性があることには留意したい。

3.1 数字にまつわる英語

Q. 次の空所には、1〜10 までのいずれかの数字を入れると文が成立する。それぞれの数字は何か。なお、カッコ内の日本語はそれぞれの英文の大意である。

① I want to [　　] in on the problem.　（私はその問題に集中したい）
② The bus is leaving in [　　] ticks!（バスがもうすぐ出ちゃうよ！）
③ The rumor put me behind the [　　] ball.（その噂のせいで、私は窮地に追いやられた）
④ They are like as [　　] peas in a pod.（あの子たちって、そっくりだ）
⑤ One of my seminar students is late for my class [　　] times out of [　　].
（ゼミ生の 1 人が、僕の授業に十中八九、遅刻する）

①の空所には“zero”が入る。数字のゼロをイメージして欲しい。その目の前の「0（ゼロ）」を注意深く見るように指示されれば、多くの人が「0」の中（in）を見るのではないだろうか。そうしたことから、“zero in (on〜)”という表現があると考えられる。なお数字の「0」は、その形状がアヒルな

どの卵に似ている発想から、クリケットで打者が0点だった場合に“duck”と言う。また、シンガポールやマレーシアでは、“I got duck’s egg on my test today.”（今日のテストで0点とっちゃった）のように言うことがある（本名ほか 2002: 84）。

②の空所は、“two”である。“tick”は時計などがカチカチとする音であり、童謡「大きな古時計」の歌詞にある「チックタック」でおなじみであろう。あのチックタックする一瞬をもとに、“in two ticks”で「すぐに」という意味で使われる。また、“in a tick”とも言う。このあたりは、日本語で「あと１、２分で着きます」と言うように、１や２という小さな自然数で表現するところは共通している。

③には“eight”が入る。ビリヤードでは「8」のボールを落としてはいけないというルールがあり、それに由来し、“behind the eight ball”で「窮地に陥る、ついていない」という意味になる。

④の空所には、②と同じく“two”が入る。“pea”とはエンドウマメで、“pod”はそのサヤのこと。つまり、1つのサヤの中にあるマメということから、“(as) like as two peas in a pod”で「そっくりである」という意味で使われる。日本語だと「瓜二つ」という言い方があり、英語ではエンドウマメを用いている点で異なるが、野菜を使っている点では共通している。

最後に⑤には、順に“nine”と“ten”が入る。日本語では「十中八九」というが、8割なのか9割なのかはっきりしない。

さて、これらの表現をELFで表現するとどうなるだろうか。それぞれ試案を示しておこう。①であれば、“I want to concentrate [focus] on the problem.”で十分通じるであろう。②は、“The bus will leave soon.”で近い意味を伝えられるだろう。もちろん、“is leaving”を残してもよいが、ここではよりシンプルに“will”で代用する案を示しておく。③は、“The rumor put me in a pinch.”でもいいが、“The rumor”を主語にするような構文は、日本語を母語とする人にはなじみにくいかもしれない。そこで、“I”を主語にして“I am in a pinch by the rumor.”はどうであろうか。④はいろいろ考えられるが、なるべく平易な英文であれば、例えば “They are very much alike.”や“They look exactly alike.”あたりで代用できそうである。⑤は、思い切って“One of my seminar students is almost always late for my class.”でほぼ同じ意味になるだろう。

3.2 動物にまつわる英語

『Cats & Dogs』という映画がある。DVDのパッケージは面白い。表面には、犬軍と猫軍が睨み合っているイラストが描かれている。裏面には、「ペット界、因縁のライバル対決。毛が舞い、肉球が飛び交う仁義なき戦い」と書かれている。その内容はさておき、本稿の関心事である英単語の言語文化論へと議論を移す。

日本語で、動物名を用いて「仲が悪い」という意味を表現する場合、「犬猿の仲」となる。つまり、「犬」と「猿」である。これに対し、英語では“cats and dogs”が一般的である。日英語間で「猫」と「犬」を用いた表現の数について、森住（2004: 185）、『ウィズダム』、『英語諺事典』、『ことわざ・英語と日本語』、『大辞林』を参照し、比較しておこう。

	日本語		英語	
	猫	犬	cat	dog
ことわざ	48	26	123	244
日常表現	12	7	25	30

表2. 「猫／犬」vs. “cat / dog”の表現数の違い

森住（2004）によれば、牧畜文化を背景として発展した英語と、魚食文化を背景とした日本語とい

う違いが、言語表現の相違に表出しているのではないかという。もちろん、社会や文化の現象をそのまま言語表現の違いに還元できるほど、言語と文化の関係は単純ではないが、無関係とも言えないだろう。

さて、言語表現数の違いだけではなく、その使われ方についても言及しておこう。“cat”は、ネズミなどの獲物に忍び寄るという意味の“catlike（こそこそした、忍足の）”という単語がある。また、猫は魚が大好物ではあるが、大嫌いな水に濡れてまで食べたいわけではないことから、“The cat would eat fish but would not wet her feet.（モノは欲しいが、努力はしない）”という表現がある。他に、用心深く、落ちても立ち上がるしぶとさから、“A cat has nine lives.（猫は長生きだ）”という表現もある。なお、ここでの“nine”は“many”の意味で用いられている（山田 2017: 158）。イソップ物語の一説に起源があるとされる表現もある。猫はネズミにとって危険であり、ネズミは猫に鈴をつけるように提案したという話から、“bell the cat”で「危険を承知で行動に出る」という意味である。

他方、“dog”についてはどうだろうか。犬は人間にのこのことついて回るというイメージから、災いや不幸が付き纏うことへと連想され、“be dogged by misfortune”で「不幸につきまとわれる」という。また、野良犬のイメージからなのか、犬のようになってしまうことを“go to the dogs（ダメになる、失敗する）”という表現がある。ろくなイメージのない dog だが、たまにはいいこともある。そこから、“Every dog has his day.（誰にだっていい時期がある）”という表現もある。

では、前項と同じく問題形式で他の動物にまつわる表現を整理しておこう。それぞれカッコ内には動物名が入る。

Q. 次の空所には、動物を表す英単語を入れると文が成立する。それぞれの動物は何か。なお、カッコ内の日本語はそれぞれの英文の大意である。

① A: I’m ordering 2 cheeseburgers, large fries, onion rings, and a large coke.
B: You eat like a [　　]!
（A: 注文はチーズバーガー2 つ、L サイズのポテトとオニオンリング、あと L サイズのコーク。
B: めっちゃ大食いやな！）

② A: What do you think about my plan?
B: You have to stop the[　　] business.
（A: 俺の計画、どう思う？
B: イカサマはやめときなって。）

③ A: Yasuo is wearing the same T-shirt as me again!
B: He is a copy-[　　].
（A: ヤスオがさ、また俺と同じ T シャツ着てるんだ！
B: アイツは人の真似ばっかりするなぁ。）

④ A: We cannot have an effect because there are too many students in this class.
B: That’s the [　　] in the room. The budget is tight.
（A: 効果が出ないよ。だって、1 クラスの人数が多すぎるもん。
B: それは触れちゃいけない問題やで。予算が厳しいもん。）

①は、“horse”が入る。日本語で「大食い」といえば、豚が連想されやすいかもしれない。しかし、実際に 1 日に食べる分量を考えると、豚よりも馬である。②は、“monkey”である。日本語で「猿真似」という表現があるが、比較的近く、英語の“monkey business”は「イカサマ商売」の意味である。③に

は、“cat”が入る。先に「猿真似」と「サル」を用いたが、英語では“cat”を用いる点で異なる。④は、“elephant”が入るのだが、1 つの部屋に象ほどの大きな動物がいると、もうスペースはなく手が付けられない。そうしたことから転じたのではないだろうか。

さて、これらを ELF で置き換えると、①は“You eat a lot.”で十分だろう。②は、“You have to stop cheating.”あたりでほぼ同意であろう。③は、“He is an imitator.”、④は“That is the problem we should not touch.”で通じるのではないだろうか。

3.3 果物・野菜にまつわる英語

1989 年に中国系シンガポール人である Dick Lee は、*The Mad Chinaman* という曲を発表した。その歌詞の中に、“Now you know what it's like to be a banana.”という一節がある。“banana”は、外側の皮の部分が黄色で、内側が白色である。村野井（2006）によると、「中国系シンガポール人である自分の言葉や外見の西洋化（アメリカ化）と自分の内なる東洋的なものがぶつかってアイデンティティが揺らぐ心情を表現」した歌詞である。さらに彼は、「ネイティブ・スピーカーを目指して英語学習を推し進める先に、何が待っているかを暗示している」（同）と懸念している。国際共通語としての英語の理念を英語教育に反映していく上で、意義ある指摘であろう。

Q. 次の空所には、果物・野菜を表す英単語を入れると文が成立する。それぞれの果物・野菜は何か。なお、カッコ内の日本語はそれぞれの英文の大意である。 ① This smartphone is a real [　　].（このスマホ、マジで欠陥商品！） ② Trump's speech was as American as [　　] pie. （トランプのスピーチはいかにもアメリカ的だった。） ③ Do you know him? He is a real [　　].（彼のこと、知ってる？本当に素敵なの。）

①には“lemon”が入る。レモンは酸っぱく、それだけで食べられることはあまりない。そうしたことから、自己完結していない欠陥のあるというイメージに結びついているようだ。②は、“apple”が入る。リンゴは特にアメリカ合衆国では非常に大衆的・一般的な果物で、そうしたことから“as American as apple pie”で「いかにもアメリカ的な」という意味で使われる。“apple”は他にも、“He often polishes the apple.”で「彼はゴマスリだ」という表現がある。日本語では「ゴマをする」が、英語では「リンゴを擦る」のだが、動作としては似ている。③に入るのは、“peach”である。桃はその甘さから人気があるのか、“You gave me this beautiful flower? You are a peach!（この綺麗な花をくれるの？君って最高！）”のように、好意的な連想を伴う表現が多い。

それぞれ、ELF 的に言い換えると、①は“This smartphone is faulty.”、②は“Trump's speech was really American.”、③は“He is really lovely.”あたりで代用できそうである。

3.4 国・言語・民族にまつわる英語

“It's all Greek to me.”という表現がある。これは、「ちんぷんかんだ」という意味なのだが、山田（2019）が指摘するように、「さっぱりわからない難問に直面した人がその難しさを外国語のせいにしてしまう表現」であり、「その底流には英語を話す人にとってギリシャは好ましくない国であるという潜在意識があったよう」（同: 180）である。このように、国や言語、民族に関する英単語には差別意識や偏見などが潜んでいるようである。いくつか見ておこう。

Q. 次の空所には、国・言語・民族を表す英単語を入れると文が成立する。それぞれの国・言語・民族は何か。なお、カッコ内の日本語はそれぞれの英文の大意である。

① It's double [　　] to me.（全く訳がわからない。）
② They are brothers [　　].（彼らは実の兄弟なんです。）
③ Excuse my [　　].（俗な言い方ですみません。）
④ A: Is Yasuko a good cook?（ヤスコは料理上手なの？）
　B: She is English.（彼女はイギリス人だから。）

①であるが、"Dutch"が入る。オランダはかつて、イギリスと海外発展を競う強国であった。そのため、Dutch には軽蔑的な意味合いが含まれる。上記の表現以外にも、"Go Dutch."で「割り勘をする」、"Dutch courage"で「酔った勢いの空威張り」などがある。言うまでもなく、発信レベルには適していない表現である。

②は、"german"である。「ドイツ」は、英語では"German"（発音は、dʒə́ːrmən）であるが、これをローマ字読みすれば「ゲルマン」となる。ゲルマン民族の大移動により、現在のドイツ語が流入し、英語の形成に影響を与えた。ドイツ語と英語は同じインド・ヨーロッパ語族のゲルマン語派に属しており、普通名詞で"german"と綴ることで「同父母から出た」という意味になる。

③には"French"が入る。言わずもがな、英仏はライバル関係にあった。そのため、フランスに対する軽蔑的な表現が生まれる土壌があった。他にも、"French leave"で「無断退出、欠勤」の意味になる。これはかつてのフランスでは、招かれた先で主人に挨拶をせずに帰ることがマナーであったことに由来するといわれている。これに対し、イギリスに対する「仕返し」のような表現もある。④は"English"が入るのだが、「彼女は料理がうまくない」という意味合いになる。これは、ヨーロッパの国々（特にフランス）では、イギリスの料理は蔑視の対象になることが多いことに由来するという指摘がある（今井 2011: 5）。

ところで「アメリカ人」は、「1 人のアメリカ人」の場合には"an American"、2 人（以上）であれば"two Americans"と表現されるのに対し、日本人を表す"Japanese"は 1 人であっても 2 人以上であっても、複数形を意味する"s"が付与されない。上記までのような国・言語・民族に対する差別意識が言語表現に表出すると仮定するならば、"Japanese"という表現も今後変化していくかもしれない。

さて、それぞれを ELF 的に表現すれば、例えば①は"I cannot understand at all."、②は"Separate checks."や"Sprit the bill."、③は"I'm sorry for swearing."、④は"She cannot cook well."あたりであれば、差別的な表現とはならないのではないだろうか。

4. おわりに

言語は常に変化している。むしろ、変化しているのが常態といってよい。言語の「正しさ」を追い求める言語政策がこれまでにも数多く試みられてきたが、成功した試しがない。言語の変化を止めることはできないのである。だとすれば、言語の変化を嘆くよりも、その変化をもたらす社会文化的背景を覗き込み、言語学習への意欲・関心を喚起する道があってもよいのではないだろうか。

本稿では、「国際共通語としての英語」という立場から、英語を学ぶ上では受信レベルと発信レベルとを分けて考えるべきだとした。つまり、他者の社会文化的背景が影響することわざや慣用表現などは、「聞いてわかる」「読んでわかる」という受信レベルで十分であり、異言語・異文化への知的好奇心を喚起する役割として学ぶべきだとした。第 3 節では、その具体例として、数字や動物、果物・野

菜など私たちを取り巻く環境に依存した表現を取り上げた。繰り返しになるが、これらを発信レベルにおいて「身につける」必要はない。もちろん、最終的には各自の自由なので、身につけることを否定するつもりはない。しかしながら、せっかく身につけた表現も、文化に深く根差しているが故に、流暢な発音で完璧な文法を用いても、まったく「通じない」可能性がある。それは、「国際共通語としての英語」が求める英語科教育の姿とは異なる。「すぐに使える英語表現」や「役に立つ英語教育」という英語教育観が支配的な昨今において、本稿で論じたような英語表現の背景にある文化的異同を味わい、楽しむという学び方があってもよいと考える。すべての学習者が、「英語を身につけたい」わけではないのだから。

[本研究の一部は、科学研究費助成事業による助成金（研究課題「『ことばの教育』における教員養成の連携に向けて」、課題番号 17K04853）におっている]

【参考文献】

Byram, M.（1997）*Teaching and Assessing Intercultural Communicative Competence*. Multilingual Matters.

藤原康弘.（2017）「自律した日本の英語教育へ―国際英語の視点」、藤原康弘・仲潔・寺沢拓敬（編著）『これからの英語教育の話をしよう』pp.49-94、ひつじ書房.

本名信行[編].（2002）『アジア英語辞典』三省堂.

今井邦彦.（2011）『あいまいなのは日本語か、英語か? ―日英語発想の違い』ひつじ書房.

牧野成一・岡まゆみ[編].（2017）『日英共通 メタファー辞典』くろしお出版.

文部科学省.（2017a）『中学校学習指導要領』東山書房.

---.（2017b）『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂出版.

森住衛.（1992）「英語教育題材論―第 7 回 ことばに係わる題材」『現代英語教育』第 29 巻 第 7 号: 30-31. 研究社出版.

---.（2004）『単語の文化的意味―friend は「友だち」か』三省堂.

村野井仁.（2006）『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』大修館書店.

仲潔.（2002）「英語教育は英語帝国主義にどう対処するか―英語教育の座標軸」森住衛(監修)・言語文化教育研究論集編集委員会(編)『言語文化教育学の可能性を求めて―言語文化教育研究論集』三省堂、pp.246-263.

---.（2008）「言語観教育序論―ことばのユニバーサルデザインへの架け橋」『社会言語学』（「社会言語学」刊行会）第 8 号: 1 -21.

---.（2013）「ことばと文化の学び―「いつか/ずっと役立つ言語文化論」序論」『岐阜大学教育学部研究報告書 人文科学』第 62 巻 1 号: 107-122.

菅原克也.（2011）『英語と日本語のあいだ』講談社現代新書.

山田雅重.（2017）『日英ことわざ文化事典』丸善出版.

---.（2019）『日英・慣用句の文化事典』丸善出版.

安井泉.（2010）『ことばから文化へ―文化がことばの中で息を潜めている』開拓社.